

重要な構成要素「い志い^し」

建築（店舗）：幕末～明治時代

参道の景観を構成する要素

「い志い」は、菓子や漬物を商う木造2階建ての店舗で、参道で最も古い建築と考えられています。全体として、参道に面した切妻・平入り^{ひら}（注1）、町屋形式の表屋と、寄棟・妻入り^{つま}（注2）で農家の形式を残した角屋^{つのや}というように、農村部と都市部の両方の建築の特徴を併せ持った建築です。

石井家は、参道斜向かいにあった東店舗から分家し、その際に参道沿いの店舗と松戸にあった店舗を移築して、現在の主屋の参道に面した表屋部分ができたと言われています。表屋部分は江戸時代まで遡るとも伝えられ、店舗は揚戸^{あげど}が設えてあり、古風な造作を残す、柴又では店舗として最古の部類に属します。主屋後部にT字型に突き出す角屋部分は住宅棟になっています。このような建物の配置形式は松戸宿にも多く存在するもので、移築とともに両地域の関係の深さがうかがえます。

主屋の規模は7間程度（約12.6m）の間口で、参道沿いの店舗としては中規模間口ですが、伝統的な参道景観を構成する極めて重要な要素となっています。生業は時代の変遷とともに変わってきましたが、店先での対面販売の形式を今なお継承しています。



昭和 40 年代（帝釈天題経寺提供）

（注 1）建物の大棟に平行な面、すなわち平に出入口を設ける建築形式。また、平を正面に向けるもの。（広辞苑第七版）

（注 2）妻とは棟と直角の壁面のこと。妻入りは、妻に出入口を設ける建築形式。また、妻を正面とするもの。（広辞苑第七版）